

第2回仙台市ダイバーシティ推進会議 議事録

I. 会議概要

日時 令和6年8月22日(日) 10:00~12:00

会場 アーバンネット仙台中央ビル4階 スマートイノベーションラボ仙台

出席者 (委員)

大隅委員長、石井副委員長、宇田川委員、及川委員、小野委員、小林委員、小宮委員、
田村委員、ビッティ委員、福田委員、本図委員、マリ委員
(仙台市)

梅内まちづくり政策局長、筒井ダイバーシティ推進担当局長、藤原政策企画部長、大沼
ダイバーシティ推進課長

II. 議事

1. 開会

○山口企画推進係長

皆様、本日はご多用のところお集まりいただきありがとうございます。

定刻となりましたので、第2回仙台市ダイバーシティ推進会議を開会いたします。

本日の司会を務めます、仙台市まちづくり政策局ダイバーシティ推進課の山口でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず初めに、会議の運営についてお知らせとお願いがございます。

本会議は公開制で行うこととしております。会議録作成のため、発言される際はマイクをご使用ください。

傍聴席の皆様にお願ひがございます。会議中の会話や発言、無断での録画、録音等をご遠慮いただき、円滑な会議運営にご協力いただきますようお願いいたします。

続きまして、委員の皆様のお手元でございます資料についてご確認をお願いいたします。

次第、資料1から4をお配りしております。

不足しているものがございましたらお知らせください。よろしいでしょうか。

また、今回の会場について簡単にご説明させていただきます。

こちらの NTT 仙台アーバンネット中央ビルは、仙台市で進めている都心再構築プロジェクトの第1号案件となっております。仙台市のスタートアップ支援施設がビルの2階と3階のフロアにも入っております。本日は、日頃からお協力いただいております NTT 東日本様からこちらの会場をご提供いただき、開催させていただいております。

それでは会議を開催させていただきます。

続きまして、開会に当たりまして、大隅委員長よりご挨拶を頂戴したいと存じます。大隅委員長よろしくお願ひいたします。

○大隅委員長

皆さん、おはようございます。

本日もお忙しい中朝早くからお集まりいただきましてありがとうございます。

全員が対面でご出席ということで、皆様がこの仙台市ダイバーシティ推進会議をいかに重要に思っているかということの表れかなと委員長としても大変嬉しく思っております。前日も、大変盛り上がった議論がありまして、後程振り返りの機会もありますが、本日もこれから策定するダイバーシティに関する仙台市の重要なポリシーということに関しまして皆様の貴重な、多様なご意見を伺いたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○山口企画推進係長

大隅委員長ありがとうございました。

それでは、ここから大隅委員長に会議の進行をお願いしたいと思います。

○大隅委員長

しばらくの間、私の方で進行を進めさせていただきたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

まず前回の会議の振り返りということで、そのあと、メインとなる指針のたたき台について議論させていただきたいと思っております。

では、事務局の方から第1回推進会議の振り返りについて、ご報告をお願いいたします。

○大沼ダイバーシティ推進課長

それでは、第1回ダイバーシティ推進会議の振り返りとして、前回会議での主な意見などについて、資料3を用いてご報告いたします。

まず初めに田村委員より、ダイバーシティの定義などについて話題提供がございました。

主なポイントとして、いろいろな「ちがい」があることだけがダイバーシティではなく、様々な「ちがい」を受け入れ互いに対等な関係を築こうとし、全体として調和が取れている状態がダイバーシティである、目指すべき方向性としては、同化や住み分けではなく共生が進むよう、これまでの働き方や生き方を社会全体で変えていくことが必要である、議論を進めていく上での留意点として、まだ誰か取り残されているのではないかと目を凝らすこと、参加の場や議論の場を作っていくことが大切である、などのお話がございました。

続いて、各委員の皆様より、ダイバーシティまちづくりに必要な視点や考え方などについてご発言をいただきました。

時間の都合上、すべてのご意見をご紹介できませんが、皆様からは、誰もが当事者になるという視点を持つことが大切、自分らしく生きられること、自分らしくいられる環境、空間を作り上げていくことが大事、無意識の偏見をどうなくしていくか、また、取り残されている人がいないかを考えていくことが大切、などのご発言がございました。

最後に大隅委員長からは、ダイバーシティは非常に広いものであり、横串を刺す活動の重要性や、様々なマイノリティへの配慮から共生を目指していくことが、今後の議論の方向性ではないかとの総括がありました。

事務局からの報告は以上です。

○大隅委員長

ありがとうございました。

では、今の振り返りにつきまして、何か補足などございましたらこの時点でいくつか受けたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。よろしいですか。

メインのところは議事次第4のところ、指針に対する意見交換になりますが、そこでもし何か、前回のところで補足がありましたら追加の発言をお願いできればと思います。それでは、先に進ませていただきます。

事務局の方で、すでに指針の骨子を作成いただいております。

前半が全体像で、それから後半が指針本体ということで、前半と後半に分けて事務局からご説明いただき、それぞれについてご意見を伺いたいと思っております。

今回まず、たたき台を初めてご覧いただきまして、それで最初の意見交換ということですので、これで終わりではありませんから、どうぞご心配なく、ご自由に、質問点なども含めて関連にコメント等々もいただけたらと思っております。

では、事務局の方からまず指針の全体像についてご説明をお願いいたします。

○大沼ダイバーシティ推進課長

それでは、指針の全体像について説明いたします。1ページ目をご覧ください。

ここは、前回、市長のキーノートスピーチでも触れましたが、仙台のまちづくりをダイバーシティの観点から振り返ったものです。指針では、前文などに、こうした考え方を盛り込みたいと考えています。

ページの上部、2021年までの年表をご覧ください。本市は、高度経済成長期を経て政令指定都市に移行し発展する中で、市民生活に関わる様々な課題が顕在化し、バリアフリーまちづくりや、環境美化、脱スパイクタイヤ運動など、市民運動と行政の連携による取組みが行われました。このことを踏まえ、1999年には「市民協働元年」を宣言し、全国初の公設民営の「市民活動サポートセンター」を設置するなど、市民協働の歴史を積み重ねてきました。

こうして培われた市民力は、2011年の東日本大震災の復旧・復興においても発揮され、多様な主体と連携した防災・減災の取組みが国連からも認められ、防災ロールモデル都市への認定や第3回国連防災世界会議の開催にもつながったものと考えています。

2021年に策定した10年間の基本計画では、「杜の都・仙台」を海外にも通用するようバージョンアップしたいとの思いを込めて、Greenの最上級「The Greenest City」をキャッチフレーズに掲げたところです。

近年では、資料の中央部分にあるように、本市の取組みが国連やOECDなどの国際機関からも注目されており、ナノテラスの竣工や東北大学の国際卓越研究大学への認定見込み、県内への外資系半導体企業の進出など、国際的に開かれた多様性のまちづくりへと進んでいます。Greenest Cityの「Green」には、資料下の緑の帯にあるように、自然・心地よさ・成長・進め！の4つの意味が込められており、それらが示す都市の姿はダイバーシティまちづくりと親和性が高いと考えます。仙台が変革期を迎える今、本市の歴史や文化を踏まえた、世界に通じるダイバーシティまちづくりの推進によりGreenest Cityの実現を目指していきたいと考えているところです。

続いて、2ページ「指針の概要」をご覧ください。

本指針は、本市が施策の検討・実施をするにあたり、盛り込むべきダイバーシティの視点等をまとめるものです。

期間は、基本計画と同じ2030年度までといたします。

本市の様々な計画と指針との関係ですが、本指針は、基本計画をはじめ各分野の個別計画をダイバーシティの視点から拡張するものと考えています。したがって、各種計画の改訂のタイミングで本指針の考え方を順次反映させていきます。

最終的には、2031年度からの次期基本計画に指針の内容を取り込むことを想定しています。

3ページをご覧ください。指針の構成案です。

全体としてご覧のような項目立てを考えておりますが、本日は指針の中心となる「4 庁内指針」の骨子をお示しして、ご議論をいただきたいと考えております。

事務局からの説明は以上です。

○大隅委員長

ありがとうございました。

今のご説明の中の2ページ目の次期基本計画は、これはどのレベルの基本計画でしょうか。

仙台市全体の計画でしょうか。

○大沼ダイバーシティ推進課長

はい、仙台市全体の計画です。

○大隅委員長

こちらの図をもう少し私なりに噛み砕いてお話ししますと、現状が今一番左のところにあるわけですが、仙台市の中の総合計画や色々な部署の基本計画と、実施計画とか個別計画があり、そこにダイバーシティの観点を入れていくために、まずダイバーシティの推進指針というのを今年度中に策定する、そのためにダイバーシティ推進会議が置かれています。

先程大沼課長からのご説明にありましたように、ダイバーシティという観点は、もうすべてのところに浸透すべきである、すなわち横串を刺すような形で、どの計画にもその観点が入っているべきであるということ、それぞれの計画について時期が来て書き替わるときに、順次書き

替えていただいき、最終的には一番右側の2031年度からは、この次期基本計画の中に、このダイバーシティの推進指針は全部入り込んでしまうようになっていきたいと、そういったことが、事務局の方で作られているその概要案ということになっております。

では、皆様この時点で何かご質問あるいはご意見などいただけたらと思います。

どうぞお手を挙げていただいて、私の方で指名させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

宇田川委員をお願いします。

○宇田川委員

発言の機会をいただきましてありがとうございます。

非常にわかりやすい説明ありがとうございました。

私のコメントとしては主に2点ありまして、1つ目は、2ページ目の位置付けのところ、既存の計画にも順次入れていくという流れについては、最短のスケジュールとなっており、現実的で良いと思いました。

ただ、計画に入れるということも重要ですが、この指針はもう来年度にはできるということで、個別の施策の検討や実施に活用できる点があれば、計画がまだ変わらない段階でも、ぜひその視点についても取り入れていただければと感じました。

2点目については、3ページのところで、こちらの説明はなかったのも、もし誤解があったら訂正いただきたいのですが、世界に通じるダイバーシティという文言が、私は少し気になりました。

世界に通じるというのは、今、仙台にあることが何か劣っているところから、世界に追いつく、単に追いつくというニュアンスを持つ意味合いがあると思っております。

もちろんまだ至らない面もあるとは思いますが、世界に単に追いつくということだけではなく、世界をリードする、世界のスタンダードを作るといったような、高い意気込みを持って作っていただくのが良いかなと思っております。

そのため、この中で仙台らしいダイバーシティというのは非常に、とても良いことだと思っておりますので、むしろこのタイトルに自信を持って打ち出していただくのが良いかなと思っております。

これに関連して、世界的な議論の動向という文言も若干気になりまして、指針というのは物事の本質、手引きとなるものですが、まず世界の動向について、その指針の中に記載する予定というのは、まず世界が行っているからといって必ずしも正しいものとは限らないですし、また、仙台として行っていくべきものとも限らないので、国際的な潮流として、きっかけとなってシステムを作るという前段階、背景として記載されるのがいいと思っております。

中身に記載することについては少し書きぶりを検討いただければと思っております。

また、そもそも世界という言葉は、地球上のすべての地域、国家や、人間社会全体のことであると認識していますが、おそらく、これまでの議論を見ますと、ここでの記載が想定されるのは、G7やOECD諸国のことかなと推察しまして、新興国のことなどはあまり想定されてないのではないかなと思っております。

他方でダイバーシティの指針ですので、世界で言うと、あらゆる国があって、あらゆる立場の人たちがいてということなので、世界の議論と言ってしまっても、一部のG7だとか、OECDなどの先進国の議論をするというのは、仙台市が世界の国に一部焦点を当ててしまうと非常に誤解を招いてしまう恐れがありますので、少し慎重に書きぶりを検討していただければと思っております。書きぶりとしては、もしG7、OECD諸国のことを記載される場合には、例えば、先進事例の紹介ということであれば、おそらく問題ないと思っております。あるいは前回の資料のような、OECD等の国際的な動向などという記載であればいいのですが、世界というタイトルを付して、一部の国に焦点を当てるとするのは、前回の議論でも取り残さないということがありましたので、留意していただければなと思っております。

いろいろと論点を挙げましたが、仙台らしいということに自信を持ってアピールしていただき

たいという思いで発言させていただきました。

○大隅委員長

宇田川委員、大変貴重なご意見ありがとうございました。

仙台のまちづくりについて、資料の最初のページで1962年の健康都市宣言というところから書かれていますので、仙台らしい自信を持ってということからは、私も宇田川委員のお話を伺っていて思いました。

他にいかがでしょうか。

福田委員お願いします。

○福田委員

今宇田川委員にご指摘いただいたこと、私自身も先んじて資料をいただいた中で、同様に感じていたところででした。

【仙台らしい】というところを強く打ち出した指針を作っていたきたいと、感じておりますし、逆に、【世界に通じる】という言葉がものすごく引っかかっておりました。

やはりその「仙台らしい」というところで、本当に尖がった指針を作っていくことが、多様性を生み出すまちづくりに繋がるのではないかなと思いました。宇田川委員の言葉に心から同調しましたので一言だけコメントとして残させてください。

以上でございます。

○大隅委員長

ありがとうございました。

他にいかがでしょうか。

田村委員お願いいたします。

○田村委員

3点ありまして、まず資料1ページ目の仙台のまちづくりとダイバーシティというところが、大変意味があることで、環境のことや市民協働、災害があって、今、外国人も増えていますよというところがこの仙台らしいダイバーシティ推進の必要性と意義みたいなことが、割ときっちりまとまっているのでここは大変重要だなと思えます。

つづいて、資料2ページ目のところで、ダイバーシティ推進指針が、2031年度以降は消えてなくなるみたいに見えなくもないと思ひまして、薄い水色で反映されていますが、いろんなちがいに配慮のある仙台市になれているのかどうかということは常に進捗状況の確認だったり、新たな課題の発見だったり、あるいはその改善も必要かなと思うので、完全にそれぞれの計画の中に吸収されてしまうというよりは、何らかのダイバーシティ推進の状況を点検したり、課題の発見や改善していく取り組みを続けた方がいいのかなと思うので、その辺りが総合計画や色々な実施計画、個別計画の中に入るのであれば良いのですけれども、ちょっと見た感じ、もう2031年度以降は何もしないのかなと見えなくもないのでその点が不安になりました。それぞれの施策の中に入っているというのはいいのですけれども、ちゃんと課題が解決しているのかということを含めて包括的に確認できる部署であったり、取り組みだったりというのは、継続して必要ではないかなと思ひました。

2031年度以降、ダイバーシティ推進指針が消えて無くなってしまわないのかとこの図を見て不安に思ったのが2点目です。

3点目が、今ご指摘あった世界的な議論の話ですけれども、確かに先進的な事例の紹介というのは1つ意味があるかなと思ひますが、OECDやG7に限らず、例えば国連とかで議論していること、ILOで議論していることは、必ずしも先進国だけではなく、途上国の意見も含みながら議論をしているところです。

昨日私、兵庫県豊岡市の会議に出て来まして、豊岡市では今、多様性推進とジェンダーギャップ

対策の指針を作ろうとしています。

一緒にアドバイザーを務めている大崎麻子さんと国連の議論を取り上げたのですが、例えばジェンダーギャップに関してもアフリカやイスラムも意見を述べているし、バチカンも違う意見を言っている中で合意形成を取っていて、必ずしも先進国や OECD だけの議論ではないのです。事例として出していくと、どうしてもヨーロッパの事例が中心になると思いますが、あんまり仙台がそこに合わせていくということではなく、あくまでも国際社会でどんな議論が行われているのかということは、この項目で整理しておく必要があると思いました。

誰も取り残さないという観点であれば、事例としては先進的なものはもちろん取り上げるのですが、国際社会の議論という視点でここはしっかりと交通整理をしておく必要があると思いました。

以上3点です。

○大隅委員長

田村委員ありがとうございました。

必ずしも世界に追いつくことが正しいというわけではないことは、今ご発言いただいた皆さんの共通項と伺いました。

他にいかがでしょうか。

本図委員お願いします。

○本図委員

今までの議論ありがとうございました。

文教政策のところで、少し前まではグローバルな視野でという話がありましたが、今、令和の日本型学校教育というのがキーワードになっております。

その時に、やはり宇田川委員や田村委員からお話もあった、世界というところの議論、ちょっとその間をとるようなニュアンスで、宇田川委員も発言されておりましたが、グローバルスタンダードをリードしていくというような、世界か仙台かみたいなことを言っているときに、文教政策の令和の日本型学校教育というのを誇っているのですが、まだまだ本当に色々なことを良くしていかななくてはいけないことがたくさんあるというもどかしさを時々感じることもありまして、そのようなところも含めて、内向きでもないですし、外に、OECD とか先進国に隷従するわけでもないですし、そのあたりをきちんと良い距離をとりながら、世界の公共善にきちんと与する、そのようなニュアンスを言いたいということは、皆さん共通していて、あとは言葉の表現だと思えます。

そのようなことで、グローバルスタンダードをリードするというニュアンスのところが強くなる言葉になるといいなと思いました。ありがとうございます。

○大隅委員長

公共善というキーワードもすごくすてきな響きですね。

ありがとうございました。

ビッティ委員お願いします。

○ビッティ委員

面白い意見を聞いて、私も言いたいことがあるなと思いました。やはり、みんな言っているように、世界に通じるダイバーシティという視点は、少し難しそうですね。

この仙台らしいダイバーシティの3点目はすごく大事だと思います。できるだけまちづくりを、みんなと同じことをするよりも、確かにこの仙台らしさを見つけて、仙台の歴史・文化・都市個性の大事さ、そういうことを考えながら、オリジナルなダイバーシティの対応を考えるのが大事ですね。仙台のアイデンティティをなくさないように、ダイバーシティを守ることが最後、一番の目的になると思います。

以上です。

○大隅委員長

貴重なご意見ありがとうございました。

今ダヴィデさんの顔を見ながらふと思ったのですが、これ1962年よりもずっと前に、例えば慶長遣欧使節団を率いた支倉常長公が、400年前ぐらいからダイバーシティを推進していたとか、そのぐらいのこと言ってもいいのかなと思いついて聞いていました。

では及川委員、お願いします。

○及川委員

私も皆様が議論されている世界というところに関しては全く同感で、ただ、実際日本は世界から遅れているのも事実ですので、うまく仙台らしさというところを考えながらやっていくと良いなと思いつながら指針の方を見ていたのですが、すごくポイントになるのは、ちがいの理解とちがいの尊重なのかなと思っています。まず一番初めにそこがないと、制度政策もつけれないし、あるいは行政だけがやるわけではなくて、市民一人ひとりがやるものにしたいたいというのが、仙台市のお考えじゃないかなと思っていますので、どのようにちがいを理解するのが仙台らしいのか、どのようにちがいを尊重しながら、生かしていくというところが、私はこの書類の中から読み取れているので、そのちがいの生かし方の大前提として、やはり理解や尊重から考えると、この視点1、2、3、4の順番を少し変えるだけでも理解がしやすいのかなと思っています。例えば、視点2だったら行政だけじゃなくて、市民が理解するというのもすごく大事な視点になりますよね。でも、制度政策を作ることが最初に出てしまうと、まず市がやることみたいな印象になってしまいそうな気がするので、順番の大切さみたいなものもご検討いただけたらいいかなと思いつました。

○大隅委員長

貴重なご意見ありがとうございました。

及川委員のお話が、庁内指針の中身について言及がありましたので、このタイミングで、その次のページからところも含めて考え方がより深まるのかなと思いつましたので、続いて、庁内指針の方向性について、事務局からお話いただいた方がいいかなと思いつましたのでよろしくお願ひします。

○大沼ダイバーシティ推進課長

それでは、庁内指針の方向性について説明いたします。4ページ目をご覧ください。

庁内指針は、基本的理念と取り組みの視点で構成したいと考えております。

内容については、前回会議における委員の皆様のご意見や、G7などの国際的な議論の動向を参考に取まとめました。

基本的理念は、ダイバーシティに関する様々な施策を進めるにあたり、共通する考え方をまとめたものです。

1つ目は、仙台の歴史・文化・都市個性の尊重で、前回の推進会議で委員の皆様より仙台らしさに関して多くご発言があり、本日もご発言をいただいているところでございます。

また、国際的な議論においても、地域に根差したアプローチの重要性が強調されています。

伊達政宗公の時代より本市が培ってきた多様性を尊重する歴史・文化などを土台とした、ダイバーシティの推進を重視したいと考えております。

2つ目は、多様な主体の参画によるダイバーシティのまちづくりです。

石井副委員長や小野委員、田村委員などから、当事者が関わることの重要性についてのご意見があったことを踏まえ、ダイバーシティ推進に必須の要素として位置付けました。

3つ目は、地域への展開です。

今回策定するのは、庁内向けの指針ですが、ダイバーシティの視点や考え方を民間にも広げ、地

域全体で取り組むことが重要であると考え、基本的理念の1つとしました。

この3つの基本的理念のもと、施策を考える際の視点を、ご覧の4点にまとめるとともに、これらを後押しするものとして、デジタルを初めとした様々な技術の活用を位置付けました。

4つの視点について説明します。

5ページをご覧ください。

それぞれの視点ごとに2つから3つの具体的な項目を示し、イメージを掴みやすいよう施策例を挙げています。

この施策例については、本日は、現行の施策を中心に記載しておりますが、中間案では例示を入れる方が良いのか、入れるとしてももう少し抽象的な書きぶりの方がよいのか、ご意見あればお願いしたいと思います。

初めに、「視点1:「ちがい」に配慮のある制度・サービスをつくる」です。

これは、いわばマイナスをゼロにする取り組みであり、様々な制度やサービス、ルールを、多様な価値観やニーズに適合し、かつ多様な選択ができる柔軟で配慮のあるものにしていくというものです。

前回の会議でも、福田委員より、多様な働き方の事例として限定正社員の取り組み、ビッティ委員より、日本での就職活動が難しかったご経験などをご紹介いただきました。

具体的な項目としては、「①不利益をなくす」と、「②平等ではなく公平」の2点を掲げています。

視点1については、分野によっては、法や条例なども施行されており、比較的政策が進んでいる部分かと思えます。

その中でも、「①不利益をなくす」では、障害者差別解消法にあるような合理的配慮の考え方を、他の少数者にも、視野を広げて考えていくことなどを盛り込みました。

取り組み事例の1つには、今年6月にユニバーサルデザインを取り入れた家庭ごみ等指定袋のリニューアルを挙げています。

本日、会場内に指定ごみ袋の現物とともに、変更ポイントを展示しておりますので、後程ご覧ください。

こうした具体的な取り組みは、指針の策定を待たず、今年度も順次できるところから進めております。

現在、建築学がご専門の石井副委員長にもご協力をいただきながら、道路などの多言語サイン表示の見直しなども実証的に進めているところでございます。

続いて6ページをご覧ください。

視点2は「なくてはならないちがいを守る」です。

こちらについては、田村委員にもご相談させていただきながら、このような形とさせていただきます。

これは誰もがちがいを持つ当事者であるという認識のもと、ちがいにより、どのような価値観や意見、考えがあり、ニーズがあるのかを正しく理解し、尊重される社会を目指すものです。

プラスマイナスで言えば、ゼロを維持する状態といえるかもしれません。

前回会議では、小宮委員や本図委員より、会社組織や教育現場における増加の事例、マリ委員より、自分の意見を言えることや、世界には様々な国や文化があることへの理解の重要性について言及いただきました。

具体的な項目として2点ございまして、「ちがい」への理解と尊重を掲げております。

「①「ちがい」への理解」では、市民一人一人にちがいがあることはもちろん、職員にも様々なちがいを持つことを明記しました。

事例としては、ちがいを理解するための各種研修などが当てはまると考えます。

また、「②「ちがい」の尊重」では、宇田川委員より、マジョリティ側の理解や丁寧な説明の重要性などについてご発言があったことを踏まえ、社会全体の意識変革に必要なプロセスについても言及しました。

これまでの本市の特徴的な取り組み事例としては、ハラルやヴィーガン、ベジタリアンなど、多様な食文化を尊重した新メニューの開発などがあります。

7ページをご覧ください。

視点3は、「ちがい」から生まれる多様な価値観や視点をまちの力に変える」です。

前回会議では、田村委員より、ダイバーシティが進まなければ地域が崩壊するというお話があり、小野委員からは、才能のある個人がそのままその才能を発揮できる環境を作るべきというご意見がありました。

これらを踏まえ、ちがいを受け入れるだけでなく、強みに変え、地域の成長につなげるとの観点で、視点3を「ちがい」から生まれる多様な価値観や視点をまちの力に変える」としました。

いわばゼロをプラスに変えるといった方向性になります。

具体的な項目として3点挙げていまして、1つ目は、力を発揮できる土壌として、まずは「①安心して、「ちがい」を表現できる」ようにすること。

次に、様々なちがいが出会い、ちがいから生まれる力を地域において発揮できるよう、「②対話・交流の場をつくる」こと。

そして、③として、ちがいの「掛け合わせ」により、相乗効果を生み、イノベーションを促進することを掲げております。

前回、福田委員や小林委員などから、まち自体に人を引きつける魅力があることや、起業家や地元中小企業の持つ可能性や、ダイバーシティとの関係性などについてご発言があり、ちがいの持つ力をイノベーションにつなげていくことの重要性について認識いたしました。

こうした考えは、OECD や G7 などの国際的文書でも、インクルージョンに欠かせないものとして言及されており、②の3つ目や③の2つ目には、そうした要素も盛り込んでいます。

続いて8ページをご覧ください。

視点4は、チェック機能の視点、「まだ誰か取り残されているのではないか？」と目を凝らす」です。

前回、及川委員より、制度政策を作る際に大切なことは見える化というご発言があり、また小宮委員からは、無意識の偏見をどうなくしていくか、また、取り残されている人がいないかを考えていくことが大切とのご意見がありました。

これらを踏まえ、データなどの事実に基づく「①実態の見える化」と、「②無意識の思い込みへの気づきや固定観念の払拭」の2点を、具体的な項目といたしました。

これらに関する施策例としては、各種の実態調査といったベーシックなものはもちろんですが、性別役割分業の問題や、家庭内で困難を抱える方をケアするケアラーなど、立場や役割が固定され、社会的心理的にも孤立しがちな方への支援といった施策にも繋がる視点ではないかと考えています。

最後に9ページをご覧ください。視点1から4に共通し、ダイバーシティ推進にあたって、最大限活用することが重要なものとして、「デジタルをはじめとしたさまざまな技術の活用」を掲げています。

具体的な項目として、まず、さまざまな技術が、公平性の確保やアクセシビリティの向上に資するものであり、デジタル技術が持つ双方向性は、市民参加を促す有効なツールとなることから、「①市民の利便性向上と参加の促進」を挙げました。

また、②は、多様性に富んだ都市は、新しい技術を様々な面から検証しやすく、イノベーションに繋がることから、活用するだけでなく、新たな技術を開発する環境整備について言及したものです。

③は、視点4とも重なってきますが、施策立案や評価におけるデータ活用の必要性を明記しました。

委員の皆様には、全体の取りまとめの方向性や視点の分け方、それぞれの項目に盛り込むべき内容などについて幅広くご意見を頂戴できればと存じます。

また、8ページに戻っていただきまして、下の図をご覧ください。

4つの視点のうち、視点1及び視点2については、法制度の整備や施策の一定の蓄積があり、今後、ダイバーシティの視点を入れつつ、取り組みを強化する部分である一方、視点3及び視点4については、まだまだ取り組みの余地が大きく、本指針の策定を契機として、重点的に取り組ん

でいくべきではないかと考えております。
委員の皆様には、特に視点3や視点4について、ご意見を頂戴できればと思っております。
事務局からの説明は以上でございます。

○大隅委員長

ご説明ありがとうございました。

私から資料についてのご質問ですが、9ページ目の①のところで例として挙げられている、この「書かない窓口」というのは具体的にはどこにどんなものが置かれているのでしょうか。

○大沼ダイバーシティ推進課長

仙台市では「仙台市 DX 推進計画 2024-2026」を策定しており、事前に必要な情報をスマートフォンなどから入力して、窓口での記入負担を軽減したり、マイナンバーカードを使用して書類への記入を省略する取り組みを進めております。

○大隅委員長

ご説明ありがとうございました。

ではいかがでしょうか。

小宮委員、お願いいたします。

○小宮委員

ちがいの話がいろいろあるのですが、私はこのような商売をしているからなのですが、やはりこのまちをどうしていきたいのかというのが最初にあるべきだなと思っております。今後、人口が少なくなり、東北エリアの中にもどんどん百貨店が少なくなっている中で、仙台が例えば、企業にとっては支店を置きたいとか、人にとっては暮らしやすいとか住みたいとか、インバウンドだったら遊びたいとか、旅行に行きたいとか、そういったニーズがどうやったら増えていくのかということが一番大切なのかなと思っております。

そのため、「ちがい」というと、「私でも」とか「私も」とかではなく、「私」が主語になったときに、ここでこうしたいと思えるようなまち、どういうまちを目指すのか、そのために、どうして行ったら魅力を感じるか、私がこうしたいと思ってもらえるようなまちになっていくのかといったところを描きながら、その支障になるものが何か考えていくのが一番いいのかなと思いき、お話をさせていただきました。

○大隅委員長

ありがとうございます。

今の小宮委員の意見の中には、バックキャスト的という言い方でしょうか。やりたい、その目指すべき姿を考えて、そこに至るためにはどのようにバックキャストするのかということが含まれていたかなと思います。

他にいかがでしょうか。

ビッティ委員お願いします。

○ビッティ委員

先程から話題に上がっていますが、仙台は、伊達政宗公の時代から国際化やダイバーシティが進んでいたのですね。サン・ファン・パウティスタを作ったのも、スペイン人の方でしたから。ずっと昔に伊達政宗公が慶長遣欧使節を派遣して世界を目指した、そういう考え方がすごく大事だと思います。

また、東日本大震災のときも、もちろんすごく言葉にもならない悲劇でしたけど、全世界からの助けを受けたので、もしかしたらそこでさらに国際化が進んだかもしれません。そしてもちろん東北大学もあって、まちには留学生が多いです。新型コロナウイルス感染症の影響で人数は一

時的に減ってしまいましたが、東北大学はこれからもっと留学生を増やす予定です。今すぐく力を入れているのです、国際化と留学生を東北に呼ぶためにはどうすればいいのかということに。

ここまでの話をまとめると仙台市は、ダイバーシティに適しているまちだと思います。

資料の説明の中でヴィーガンやベジタリアンや宗教上の制限がある方向けのメニュー開発のご紹介がありましたが、やはり大切に考えるべきですね。これから外国の方が短期滞在も長期滞在でも増えていきますから。

もちろん、行政自体はできることは限られます、各店の問題でもありますから。でも、例えばQRコードを使って料理に使われている材料が見えるアプリを仙台市も支援して開発できるんじゃないかと思います。

特にホテルの朝ご飯とかはそういうのはすごく大事ですね、何を食べるか、何が食べられないのかというのは。特にアレルギーはもちろん、でもハラールとか宗教にも制限があります。

そして対話できるスペースを作るという観点では、これから勾当台公園も新しくなりますが、仙台のいいところは毎週末新しいイベントがある点です。しかし、外国人にとってはアクセスしにくいと思います。英語の情報はないし、チラシとかパンフレットは全部日本語ですから。

これはもったいないので、もうちょっと外国人も楽しめるイベントにすれば、参加する人たちも増えます。これは観光の問題でもあります。もっと呼んだほうがいいです。仙台に来たら何もやることがないと思っているけど、実は勾当台公園に行けば何かしらのお祭りをやっている。だから、もっとちゃんと対応したほうがいいと思います。

そして、デジタル技術の件ですけど、AIを使えばすごく楽に翻訳・通訳とかができるけど100%正しいわけではないので、最後に母国の人にチェックをお願いする必要があります。

このようなことも考えながら行動すれば、第1回に言った通りすでにすごく暮らしやすいですけど、さらに良くなると思います。

○大隅委員長

たくさんのご意見ありがとうございました。

次、いかがでしょうか。

小林委員、お願いします。

○小林委員

大きく2つあるのですが、まず全体のところとしては、このマイナスのところをゼロに変えていく動きは非常に重要だと思っています。

一方でそれをプラスに、本当にまちの力に変えていくということが、やはり重要なんじゃないかなと思っています。

前回の議論でもダイバーシティというのは、あるのが当たり前、そのようにしていかないといけない部分だと思っていますので、そこを整えるのはもちろんのことで、いかに仙台がそれを活用して、どのように成長していくのか。

これが最初の指針の全体像のところにもありましたが、やはりこの点が非常に重要だと思っています、その意味ではこの視点3のところ「掛け合わせ」ですとか、そのような文脈で書いていただいているのかなと思うのですが、ちょっと書き方が個人的には、抽象的かなという印象があります。

このマイナスをゼロにしていくというのは、本当に広く全体を見て抜け漏れなくやっていく部分だと思いつつも、例えば新しい産業を作っていくとか、そのようになったときに、それも同じく全体満遍なくというよりは、何か突出したものを作りに行くことが重要だと思います。

そのような機能がスタートアップであったりすると思うのですが、グローバルな産業を生み出していくことや、スタートアップ企業を作っていくことで、何かもう少し、アグレッシブな文言をこの「掛け合わせ」のところに入れてもいいのではないかなと、そのような意味では、ちょっと物足りなさを、私個人としては感じました。

もう一つは、基本的に1から4の視点のところで重視されているのは、どちらかというとい今いる人に対しての不便を解消していくとかそういう文脈が多いかなと思うのですが、特にこの「掛け合わせ」みたいなのも含めてまちの力に変えていくというときには、例えば海外の人を呼び込んでいくとか、そういった部分もやはり力になると思っていますし、そういう多様な人がいるからこそ「掛け合わせ」がより加速されていくと思います。

そのため、呼び込んでいくという視点も、どこかにあってもいいのかなと個人的に感じた部分でした。

以上です。

○大隅委員長

ありがとうございます。

マイナスをゼロにではなくて、さらにそのプラスの方向に持っていくためにはという積極的な部分についてのご意見を小林委員の方からいただいたかなと思います。

他にいかがでしょうか。

では小野委員お願いいたします。

○小野委員

具体的な指針の方向性について、色々私もお話ししたいことがあるなと思いました。

まず4ページ目なのですが、前回の議論を踏まえて、当事者が関わるといった視点を盛り込んでいただきましてありがとうございます。

改めまして、この当事者が関わるといったところは本当に重要なことだと、日々、企業活動をする中で感じている次第です。

やはりマイナスをゼロへとといったところですか、ちがいに配慮のある、ちがいをどう理解するかっていったところが、事実、今、日本のダイバーシティの現状なのかなと思っています。

それを今後プラスにしていく上でも、やっぱり人々の理解が変わるといったところから、実際に行動が変わるとか、価値観が変わるためのトリガーになるところが、マイノリティ、例えば障害のある方ですか、LGBTQの方々ですか、身の回りにいて、接したことがある、触れ合ったことがある、さらには一緒に活動をしたことがある、関わり方が深まれば深まるほどやっぱり理解も深まり自分の行動が変わってくるので、さらにその経験をもとに、他者にもっとこうしたらいいと働きかけるような、人材や市民の方々が増えていくのではないかなと思っています。

例えば、地域活性化のお話の中で、「関係人口」という言葉があるかと思うのですが、そういったマイノリティの方と関わった経験がある方が、関係人口のような言葉で表されて、そういった割合が増えていくことは確実に、5年後10年後のまちのあり方にも繋がってくるのではないかなということをお最近非常に思っておりまして、その評価の部分に繋がってくるかと思うのですが、そのような点を、仙台市の皆さんの中でも取り入れていただくこととか、仙台市内の企業の皆さんにも、何を目指すかといったところでそのような測り方が1つあるのではないかなと感じました。

もう1点、大きなところとしては、先程あったとおりで、ゼロをプラスに変えていくといったところで、世界に誇れるまちという視座の前半で、仙台市の皆さんの高い視座を伺いましたので、さらにもう二、三段階プラスを目指せるのではないかなといったところを、7ページ目を拝見しまして率直に感じたところでした。

まず、書きぶりかもしれないのですが、私達ヘラルボニーも、ちがいをリスペクトするか、ちがいを尊重するという言葉を非常に大切にしております。

ちがいに対して「配慮する」はやはりまだ上下の関係性がちょっとにじむ表現かと思っています、それこそマイナスをゼロにするフェーズなのかなと思っているのですが、ちがいが受け入れられるところからさらにプラスを目指すとなったときに、ちがいが輝くであったりとか、ちがっているからこそ、才能が発揮されるような場所というものが、まちの中に実現できたり、例えばそれがまちの中でのシンボリックな取り組みになったりすると、それこそ世界に誇れるようなまちづ

くりの事例としても、素晴らしくアピールできるのではないかなと感じました。
私から、こちら2点になります。

○大隅委員長

ありがとうございます。

ヘラルボニーさんは「異才」の「才」を才能ではなくて、「彩」を使ってらっしゃるというあたりのところも、その輝くとか尊重するというあたりを目指しておられますよね。

他にいかがでしょうか。

石井副委員長。

○石井副委員長

全体を見ると、前回の委員の皆様からの発言がうまくすべて入っているなと思います。細かいことはこれから詰めていくかと思いますが、市としてこれらを打ち出せることはすごく強いというか、意気込みを感じます。

これが色々な部局での、また横断的な取り組みとして、1つ1つこなしていけたら、素晴らしいな、というのがすごく率直な感想です。

基本的には「庁内指針」ということで、市としてまずどのような方針で行っていくのかという大きな意気込み示すものだとを思うのですが、このような考え方に共感してくれる、こういう意識を持った市民がどんどん育っていかなくてはいけないと思います。

上から理念や目標を掲げてやるだけではなく、自発的にこういう意識を持った人たちが増えていって、そこで色々な取り組みが生まれてくるということを期待したいと考えて、私は教育がすごく大事なのではないかと考えています。特に市でできることと言えば、小学校と中学校の義務教育の中で仙台らしいダイバーシティの考え方をしっかり伝えていくことができれば、10年経って、そのような人たちが大人になれば、間違いなく社会は変わると思います。

今の子どもたちは、我々が思っている以上に、このようなことに対してすごく自然に理解もできるし、共感もしてくれると思うので、そのようなマインドを持った子どもたちをぜひ育てたいと思っています。

それは時間はかかるかもしれないけど学校教育の中でできることであり、30分でも1時間でも時間を取って、子供たちに伝えるわかりやすい資料を作りながら、伝えていく。そして考えてもらう。また、それを伝える先生たちにもしっかり理解してもらうようなことを積み重ねてやっていくことで、10年継続すれば相当変わるのではないかなと思います。このようなマインドを持った人をしっかり育てるとする市としての姿勢をしっかり打ち出して、実行していくことが、必ず将来には、時間はかかるかもしれないですが、実を結ぶ一番手っ取り早い方法なのかなと思いましたので、その辺りの視点をどこかに入れていただくと、仙台らしいダイバーシティの進め方ということに繋がっていくのではないかと、思ったところです。

○大隅委員長

石井副委員長、大変貴重なご意見ありがとうございました。

確かによく見ると、ここに教育関係があんまり入ってなかったということは盲点というか、灯台下暗しでございました。

少し近いこととしては、広報であったり、あるいはコミュニケーションであったり、せっかくこれだけ良いことをやっているのにというのが浸透するためにどのように行ったらいいのかということも、デジタルを初めとしたところが基盤に支えらしたら、出て行くところに何かあるといいのかなということをお自身、一委員として考えた次第です。

マリ委員をお願いします。

○マリ委員

ダイバーシティがない部分、遅れているというのが先ほどの議論の中でもありましたけど、逆に

トップランナーになっている、遅れてないという場所を見つければそこがダイバーシティなのではないかということを考えています。

エコ的にすごく進んでいるとか、女性の支援とか、保育所全部無料になりましたとか、仙台市が進んでいるというふうイメージがあれば、外から見るとダイバーシティが進んでいると見えるのではないのでしょうか。

ダイバーシティはすごくおもしろい議論とか興味深い議論になりますけど、毎回の専門家に説明を受けると、何となく理解できるのですが、多分、市民とか世界に向けて「仙台がダイバーシティ」と言っても一言では伝わらないかなと思います。

先程のお話もありましたが、遊びに行きたいとか住みたいとか、誰でも暮らしやすいとか、何か繋がってもいいかなと思いました。

今でも仙台市のダイバーシティ推進が、外から引っ越してきて欲しいとか、外から就職してきて欲しいとか、会社に入って欲しいとか、新しいことにチャレンジしてほしいとか、色々あるが、何のためのダイバーシティかというのをはっきりさせたほうがいいのではないのでしょうか。

「誰でも暮らしやすいまち仙台」のためにダイバーシティは色々できるかなと思います。マイノリティの話や、障害のある人とか、女性のこととか、外国人のこととか、いろいろな点で、誰でも暮らしやすいという考え方でほぼカバーできるかもしれないかなと思いました。

今回作成する目的のさらに先になります。ダイバーシティ推進指針ができてから、次はどのようなものにつながっているか、行政がやることで市民のマインドがどのように変わっていくのか、ダイバーシティ推進をすることでどのようなことにつながっていくのかということを考えているところでした。

○大隅委員長

ありがとうございます。

繰り返しですけど、誰でも暮らしやすいという言葉は、そのダイバーシティの一番重要な、精神をやわらかく言い当てているのかなとお話を聞いて思いました。

もう一つ、今マリ委員が色々言っていた中では、評価の基本計画などを立てたときに、それはどこまで進んだのですか、ということの後で評価できるような仕組みづくりについても、資料で言うと3ページ目の一番下に「進捗管理(or 評価方法)」と書いてあるあたりのところを、もう少しこれから考える必要があるのだと読み取った次第です。

及川委員お願いします。

○及川委員

すごく細かく網羅されていて、行政という形でやるとこういうのはものすごく必要なことだと理解しました。

ただ、ビジネスセクターの人間としては、やはり整理整頓みたいなものがあつた方が少し伝わりやすいのではないかとことを思っています。

まず優先順位が何なのかというところで、期間が長いですから、まずそのダイバーシティと言っても広い中で、ジェンダーからやるのか外国人からやるのか、あるいは若者が住みやすい活躍できるまちか、あるいはさっき小林さんがおっしゃっていたみたいな、例えば外国人×若者の組み合わせで、ベンチャーみたいな、イノベティブなまちづくり仙台みたいなことをやるのかというところを、優先順位1、2、3でもいいですし、大きな枠組みでそういうセクションを作られても伝わりやすいかなと思います。

そうすると、前段で言っていた、日本をリードする仙台って言ったときに、何か大括りのダイバーシティでリードすると網羅的になってしまって、先ほど委員長がおっしゃっていた広報的な部分も分散してしまいます。

例えば、先程田村委員からあつたみたいに豊岡市なんかは、ジェンダーダイバーシティでも、非常にブランディングしたと思います。豊岡ブランディングは素晴らしいとされていて、ダイバーシティをやっている人達がこぞって豊岡に行くみたいな、そういう世界がここ10年ぐらいで作

られていて、豊岡見ずにダイバーシティを語るな、みたいな感じになっています。先日も気仙沼からいらしてました。

そのぐらい例えば、仙台が日本の中で目立っていき、リーダーシップを取っていて、ケーススタディを提供するには、何が優先順位1位なのかを決められたらいいのではないかなと思っています。

仙台にはこれだけ大学もあり、これだけ外国人の方もいて、これだけ老若が揃っているというベースの資源がたくさんあると思いますので、その中でバンと上がっていくものは何だろうと優先順位をつけることで広報戦略にも繋がるのではないかなと思っています。

それからもう1つが、そこにおけるビジネスセクターの役割というのをもう少し明確に描かれると良いのかなと思っています。もしかしたら、地場のいろんな企業が連携することによって、大企業だとどうしても支社みたいになってしまうところもありますが、そうではなく、仙台にいて、創業して仙台の地場にいる人たちが、固まって動くことによって、仙台はこのようなところだからと大企業の支社が本社に何か言えることが、起きてくるのだろうというところで、そのビジネスセクターの役割、例えば仙台ビジネスダイバーシティ会議などということを行って、外国人採用をどのようにしていくのか、若者の就労をどのようにしていくのかを行っていき、世の中にメディアを通じて出していく、仙台市〇〇宣言みたいな形でもありえると思いながら、ビジネスセクターがやれることで、割と早めに結果が出せるというか、アクションが企業の中だとまだ起こしやすい部分があると思います。企業のトップを連合していただき、そのようなビジネスセクターの役割を、行政とともに作っていくことが、何か1行でも良いので、書かれると良いのではないかなと思いました。

以上2点です。

○大隅委員長

大変貴重なご示唆をいただきましてありがとうございました。

優先順位というのは、なかなか行政的にいろいろ難しいところもあるかと委員長として推察はいたしますけれども、やっぱりすべてのところで一番にはやっぱりなりにくいだらうと思いますし、資源は限られているということもあるので、優先順位がつけられるといいかなと思いますね。

では、福田委員お願いします。

○福田委員

今、及川社長が言われたこと、本当にそうだなと感じます。また、前段で、及川社長が「視点1、2、3、4の順番を少し変えるだけでも理解がしやすい」ということをおっしゃられたことから、私なりに色々考える中で、先程言われた「行政よりは民間の方が早く動けるのではないか」と私も考えるに至りました。

その視点も含めて考えると、私見となりますが、この1、2、3、4の順番は、まず視点4の、「まだ誰か取り残されているのではないかと目を凝らす」ことをまず第1に考えながら、2番の「なくてはならないちがいを守る」でちがいを守った上で、3番「「ちがい」から生まれる多様な価値観や視点をまちの力に変える」、ここで民間の力が生まれてくると思うのですが、それを支援する形で最後に視点1の制度&サービスを行政としてフォローアップいただくという形があってもいいのかなという事を、先程及川社長のお話を聞きながら自分なりに感じたところがありましたので、発言とさせていただきますと思います。

加えて、全体的なこの視点、指針の骨子を見させていただく中で、ここに書かれている基本的理念の一番初め、「仙台の歴史・文化・都市個性の尊重」というところはものすごく大事な事と思っており、これをぜひ生かして指針を作っていかなければいけないというのが感じるところです。その思いの中で、それぞれの視点の中身の詳細を見ていくと、見れば見るほど、本当にうまくまとまっている、網羅されていて綺麗だなと思うのですが、一方で、尖っていないな！と感じます。「仙台らしさ」というこの会議の冒頭で言葉があったところですが、暴論かもしれませんが、

今回の骨子からは一切なくなってしまったのではないかなと感じています。これを、例えばですが、「いやこれ実は札幌の施策です」とか、「広島のもです」と言われても、「そうですか」と受け止めてしまうかもしれません。そのため、仙台の指針はこれだということ、冒頭の基本的理念、ここにしっかり書かれていますが、あれはどこに行ったのだろうかとならないように、「尖がった」という言葉が適切かどうか分かりませんが、やはり独自性をもっと出した指針を示すことが必要で、それがあつた事で、民間に対しても、将来的な仙台市の各種施策、取り組みにも、しっかりフィットした形で落とし込まれるのではないかなと思います。そして、「なくてはならない「ちがい」を守る」というところで、やはり不利益をなくすという点に関しては、国の施策が正しいかどうか、国際的な動きが正しいかどうか、も仙台市としてしっかりと見定めなくてはならないのではと思っています。今週、楽天の三木谷会長が、自民党の総裁選を見るにあたって発言された言葉が、私が前回、発言させて頂いた働き方の多様性という点で大切だと思いました。三木谷さんの言葉をそのまま引用すると、「国家が『一元的に』単純な時間制限を押し付けるのは、仕事を通じて挑戦したり、より働いて自分の力をあげたり、収入を増やしたいという人の自由を奪う愚策だと思う。こんなことを言うと叩かれるのだろうけど、日本は働く人が減少し、移民も否定的との見解を示した上で日本の将来を考えているベンチャー起業家の一人として、敢えて発言させて頂きました」というコメントを残されています。まさしく私自身も中小企業、一企業の立場として、当社の従業員で、「もっと働きたいです」とか、「技術を磨いて先輩達に追いつけ、追い越せで頑張りたいけど、早く帰れと言われます」と相談を受けても、会社としては技術向上のために場所を提供する程度しかできません。できる限りのことは会社としても対応したいので、多様化、ダイバーシティの中で、国がこう言っているけれども、仙台市は自由に働き方を選択できます！といったまちであってほしい。但し、決してブラック企業を作るってことではなく、契約と違反した働かせ方をしていたらそこをしっかりと罰せれば良いと思うのです。ダイバーシティが求められる中で「このような働き方をしたい」という思いや意識を、企業としては応援したいですし、まちとしても支援するべきではないかと考えておりました。あと、余談ですが、日本は本当にダイバーシティが遅れているのかな？と僕自身はすごく感じています。今、NHKの「光る君へ」をずっと見ているのですが、あの時代に女性が読書して、あれだけの世界的な書物を残すということは、世界でも例を見ない素晴らしい国なのではないかなと個人的に思っています。その日本の歴史、仙台の強みというところを、今回のこの指針でうまく作り上げて、進めていければ良い！というのを個人的な感想を含めて、述べさせていただきました。

○大隅委員長

貴重なご意見ありがとうございます。

目標は高くということは大事だと思いますし、先程も及川委員からもケーススタディになるようなというようなご発言がありましたけれども、そのようなものが作っていきけるといいかなと思っております。

次いかがでしょうか。

筒井局長。

○筒井まちづくり政策局ダイバーシティ推進担当局長

今のこのビジネスの話からは少し違う話になってしまうのですが、先ほど、福田委員から視点の4を一番初めにしてはどうかというお話がありました。今色々とお話を聞いていて、視点の4についてはまだご意見をあまりいただけていないかなと思っているのが1つです。

また、視点4を書きながら、「目を凝らす」というところで、今書いてあることは確認すること、注意深く見ること、理解を深めることといった、比較的精神論みたいなことが少し多くなっている

のですが、私としては目を凝らして気付いていくための、何か仕組みを社会の中に持っていくという視点がもう少しあった方がいいのではないかなという迷いも少しありまして、そのようなところもご意見をいただけたらと思っているところです。

施策として、今仙台市で関連があると思っているものをご紹介しますが、本市では昨年「仙台子ども財団」という外郭団体を立ち上げまして、理事長が湯浅誠さん、全国子ども食堂支援センターむすびえの理事長さんで、昔、年越し派遣村の村長さんとしても大変有名だった方です。湯浅さんは、子ども食堂の支援をされていますが、今「居場所」をキーワードにして、子どもだけに留まらないで、全世代型、もしくは小野委員がおっしゃるような障害のある方も含めて、色々な方々がいられるような地域の交流拠点を増やしていく、そのようなことを子ども財団の仕事の1つとして行っていくのはどうなのだろうかと財団の中で考えています。仙台市の財団ですのでもちろん仙台市の施策と連動しながら、そのようなことを考えていくということになりますので、私としてもその「居場所」というのが、誰か取り残されていないか目を凝らすための仕組みの1つとして機能していくかなと、色々な人との関わりが深くなっていくと、ちがいにに対する理解も深まっていくという話もありましたが、そのような色々な人たちの関わりが増えていく場所というのを、施策としてどんどん広げていくというような、そのような視点もあった方がいいのかなと考えておりまして、それを視点4に入れるべきなのかなとも迷っているところです。皆さんのご意見も、何かあればお聞かせいただけたらと思っています。

仙台の施策としては、視点の3のところをすごくやりたいと思っているのですが、一方で取り残されている人たちのケアということも今施策の中ですごく大きく、ヤングケアラーのことや、ひきこもりの方など、そのような孤立しがちな、特にコロナ以降、社会的な繋がりが分断していた中で、孤立してしまいそうな方たちを取り残さないということも一方でとても大事ななと思っています、そのようなことが何とかこの指針の中にもう少し反映できたらいいなと考えていましたので、お話しさせていただきました。

○大隅委員長

ありがとうございます。

及川委員お願いします。

○及川委員

先程言った優先順位というのがここだと私は思っていて、何が見える化するかによって、優先順位が決まるのではないかと考えています。

例えば、企業などでよく行っているのは、男女の賃金格差の問題ですとか、女性管理職比率ですとか、女性の意思決定者数がどれぐらいいるかということで、女性の中に取り残されている人たちが何人いるかというのが見えるかと思えます。

あるいは、若者の流出率とか流入率とかによっては、若者が居づらいまちとして、取り残された若者は去っていくというような話になります。

あるいは独居老人の数をカウントすると、独居老人というものに対して、どこまでサポートしようとしているのか、独居老人の幸福度みたいなものが見える化することによって、そこをまちが気にしているのだということが分かるので、何が見える化するかということを決めて、これは企業が行っている手法ですが、ホワイトペーパーを作ります。

現状の白書で、あるべき姿みたいな5年後にはこの人たちをこのぐらいにしていきたいと思いますということ、あるいはベンチャー企業の何か割合というと、企業に入れない人たちで何かやりたいと思っているが、何か悶々と企業で働いている人達も取り残されていて、本当にやりたいことがやれないで取り残されている人みたいな方もいます。

そのため、そのような考え方で中心になる、見える化する項目を決めていくのも1つの方法ではないかなと思います。

企業のケーススタディでした。

○大隅委員長

ありがとうございます。

PDCA で最後、チェックのところに、視点4が来ているような形で最初多分作られたのではないかなと思います。

これから仙台市をこのようにダイバーシティを推進していくといったときに、何かその前提となるところが先にあったほうが分かりやすく、だからこのようにするというようなことが見えるのではないかなというようなご意見かなと伺いましたが、少しビジネスの話も出てきているのですが、もしよろしければ、まちづくり政策局の梅内局長、お願いします。

○梅内まちづくり政策局長

委員の皆様からお話が出ておりましたが、我々も視点の順番については悩んでおまして、視点1、2、3、4も何度か並べ替えをして、今回の委員会ではこの順番でお出ししています。先ほど福田委員からもお話がありましたが、色々な人に配慮していくと、視点の記載内容が丸くなっていくというところがあります。

今回は指針の骨子をお示しておまして、これから中間案に向けて肉付けをしていくのですが、その際は、冒頭にあった仙台のこれまでの歩みを反映したものを指針の中に入れていかなければならないと思っています。

指針の中に入れることで、市職員や市民の皆様にも分かりやすくというお話をたくさんいただきましたので、仙台市では今までこのような取り組みを行ってきたと、今及川委員からもありました通り、これを目指すということをはっきり示したいと考えます。かつて支倉常長がヨーロッパを目指したときと同じように、小林委員が今日、仙台から宇宙を目指していると同じ状況だと思うのですが、1611年に慶長津波がありまして、仙台藩で2,500名ぐらいの方が亡くなって、3年後に復興も兼ねて経済政策を行っていこうということで政宗公が遣欧使節団を出しているのですが、まさに同じように、震災の後、復興して、人口減少社会が来るという中で、どのように行っていくのかということやケアの問題、居場所づくりの問題、いろんな部署でそのようなところを悩みつつということではあります。ですから、先程のお話は、我々が日々悩んでいるところではあり、大変変なことに富むものだなと思っています。どこまで消化できるかという自信はありませんが、頑張ってみたいと思っていますので、残り30分よろしく願いいたします。

○大隅委員長

では、本図委員お願いします。

○本図委員

今までの皆様の議論を踏まえてですが、私としては今回、推進指針を、マリ委員が前回おっしゃるべきだったと発言されたところと通じるところがあるのですが、庁内指針であるため PDCA の関係になっているのも分かるのですが、推進指針というところではいいのですが、庁内となってしまうと、少し具体的ではあるのですが、限定される気がしておまして、大変妄想ではあると思いますし、夢想だと思うのですが、ダイバーシティ都市宣言ぐらいに持っていただいても良いのかなという思いがございます。

もし宣言ぐらいの本当に大きな、それこそ10年後20年後仙台のあり方を考えるとこのような年表が出てきたときに、ここでダイバーシティ宣言というものが出たといったものになれば良いなという思いがありまして、その時に、やはり委員の皆様からご意見があったところなのですが、「何のため」は「誰もが暮らしやすい」と思うのですが、それをもう少しブレイクダウンして、暮らしやすいというのは、ホワイトペーパーとの話も今ありましたが、具体的にはどのようなことなのかというのが、企業が増えるとか、雇用が増えるとか、メンタルな問題で病むことがなくなるとか、色々な指標があり、子育てしやすいとか、結局はここで生きていきたい、生きやすい

という、そのようなことに繋がるデータもいただきたいということと、もう1つ、まちの力とは具体的には何かということをも市民と一緒に考えていくという点があるといいなと思いました。そのことは、例えばですが、ここでPDCAを回していくという点では、大きな枠組みで色々議論するとしても、ダイバーシティとは何で、これを推進していくと自分にどのようなメリットがあるのかを、子供たちも考えれば大人たちも考える、民間も考えるというその議論の場や、これからもダイバーシティでやっていくべき中身はどんどん変わっていくのか、そのような幅もある上での宣言になっていくといいなと思っております。

教育というお話があったのですが、本当にその通りで、今、日本の学校はあまねく探究の活動をやっておりまして、国内とか世界の課題をどのようにしていくべきかを一生懸命考えています。仙台の学校も、絶対全然例外ではなくて、総合的な学習時間とかそのようなところで、横断的に探究活動を行っているのだからここにダイバーシティということが入れば、子供たちの価値観とか学ぶ意欲は本当に育っていくと思います。

○大隅委員長

ありがとうございました。

宮城教育大学の本岡委員ですので、やはり教育のあたりのところ、重要ですね。私も先日、(異才とも言える)ギフテッドの子供たちをどうやって伸ばすのかという国際会議に呼ばれて出たのですけれども、やっぱり今回、少し書き込みが少なかった教育あたりのところも、もう少し伸ばせると良いのかなと思いました。

ただし、あんまり色々な方向を向いていると、どこが本当に重要なのですかという、及川委員から言われているところも、両方加味しつつというのはなかなか難しいお題かなと思います。仙台市がやはりどういったまちでありたいのか、市でありたいのかというあたりのところで、今回のそのキャッチフレーズはGreenestという形になっているのですけれども、この辺りのところについても少しご意見を伺えたらいいのかなと委員長としては思っております。

○田村委員

また3点ですが、私今日も大阪から来ました。阪急沿線に生まれ育ちまして、今も住んでおります。阪急電鉄、いまは阪急・阪神ホールディングスという会社になっていますが、その会社の社会貢献活動に少し携わったことがあります。阪急電鉄では創業当時から沿線文化を作ることにも力を入れていて、現在も「未来にわたり住みたいまち」というキャッチコピーで社会貢献活動をやっています。

仙台市でそのまま使うわけにはいきませんが、この仙台がいいまちだなと、ここにずっと住みたいなと思うようなまちにしていくことが、今回目指しているところではないかなと思います。ダイバーシティの議論でも組織マネジメントでも、最近ではインクルージョンの次の段階としてピロギングがある。排除されないことに加えて、ここで活躍することが自分にとって居場所であり、居心地がよく、そこに参加したいと、そのようなまちにしていくというのは1つ、ポイントじゃないかなと今日の議論を聞いていて思いました。

それで言うと、視点3の②が「対話・交流の場」ということになりますが、この辺りに居場所というキーワードがしっかり入ってくるといいのではないかなと思います。

私は関西大学で留学生だけの授業を持っていて、留学生に言われるまで気が付かなかったのですが、なぜ関西大学に来ようと思ったのかと尋ねると、村上春樹ですって言われました。

ビッグドリームを掴もうと思って日本に来てないと言われました。大きくはないが、確実な幸せがあるのがこの辺りのまちですよと言われても、言われるまで気が付かなかったです。ビッグドリームはないのかと少し寂しかったですが、でもそれが阪神間のブランドイメージですよと韓国人と中国人の留学生に言われまして、なるほどと思いました。

では、仙台がどんなまちとしてイメージされて、例えば留学生から仙台に行きたいと思ってもらえるのかというのはもう少しここで議論をした方がいいのかなと思いました。

2つ目は、さきほどの豊岡市の話の続きになりますが、ジェンダーギャップ解消の取り組みを大

崎先生が「豊岡メソッド」という本にまとめました。豊岡市はなぜあれを始めたかという、若い20代女性の流出が激しいから。このままだと、豊岡が減んでしまうからジェンダーギャップを解消しよう、という明確な目標がありました。

入口として大事なのはやはりエビデンスであり、今何が起きているのかを統計で語るということはすごく大事で、仙台の場合、何が今課題なのかということはしっかり議論しておく必要があると思います。

豊岡と比べると仙台は人口が増えていますし、率直に言うと東北で1人勝ちです。

仙台がこれからダイバーシティを進めていき、周辺から人口が移ってように見えると、周りの都市は多分恐怖を覚えると思います。この指針やビジョンがそのように思われてしまうと、好ましくないとします。

日本国内での奪い合いではなく、まさにそこで海外に目を向ける意味があるのではないかと思います。それはもう昔から伊達政宗公の時代から海外に目を向けていたため、日本国内で奪い合うのではなく、海外に目を向けていくことで、それぞれ東北のまちも栄え、そこから引き剥がして仙台に来てもらうのではなく、仙台を目指してくる外国人が仙台を入口として東北に広がっていくということかと思えます。

それぞれの都市でダイバーシティを推進すれば良いという話で、仙台から山形がいいなと思えば、山形に行けばいい話なので、仙台としても、もう少し世界を見据えていますよという尖り方も必要ではないかなと思います。

世界に開いていきますということを打ち出し方も必要ではないかなと、そこは豊岡とは違うところだと思います。

○大隅委員長

東北大学の卒業生は、みなさん首都圏などに行ってしまいます。

そのため、むしろそこから引き剥がして、首都圏からもっと仙台に来てほしいと思っています。

○田村委員

愛着の話ですが、今日、私これが終わってからせんだい・みやぎ NPO センターの元代表理事である加藤哲夫さんの墓参りに行く予定です。昔、せんだい・みやぎ NPO センターでは「せんだい CARES」というイベントをやっておりました。1ヶ月期間を設けて仙台のまちをみんなでケアしようという話です。まちに自分が愛着を感じるのと同時に自分たちもまちに愛着をしっかりと感じて、何かできることをやっていこうという、そのような発想です。ニューヨークはそのような取り組みを行っていて、それを仙台でも昔は行っていました。すごく素敵だと思って僕もその時期に仙台に来ていました。

まちの愛着を育てていくことが、今のところ視点の3になり、居場所の話と、自分にとって居場所となるまちをちゃんとケアしていくことで、さらに愛着が増していく、その組織マネジメントのダイバーシティ論でいうとピロギングの話だと思いますが、そのあたりがもう少し入ってくると、仙台に今いる人たちが愛着を感じて、このまちをケアしていくことが、仙台らしいダイバーシティの推進に繋がるのではないかなと思います。

○大隅委員長

小林委員お願いします。

○小林委員

委員の皆様からのお話などを聞きながら自分の中でも考えていたのですが、色々な人が住みたいなと思えるまちにしていくことそこが重要だと思ったときに、私自身ここに呼んでいただいているのも若者とか、あとはスタートアップとか産業とかそういう視点かなと思うのですが、その視点で考えたときに、私自身東北大にいたときに感じていたのは、すごく優秀な学生が全国から集まってきます。仙台に住んでいて皆さん仙台をすごく好きだと、ここで住みたいという人が

本当にたくさんいます。

でもやっぱり、ほとんどが県外に行ってしまいます。

それは、企業がないからだと思います。

東北大学の人で、私が知っている人であれば銀行に入るとか、あとは市役所とか、県庁とかなどの行政に行くとか、または起業するとか、正直そのくらいしか私はあまり知らないなと思っていて、仙台に行って、住みたいけど住めてない人は、若者が結構大きいのではないかなと個人的に感じています。

それを解決するという観点で、働きたいと思えるような企業とか産業をこの地域に作っていくということだと思っていますので、何かその点でのダイバーシティの掛け合わせみたいなのところが考えられるといいのかなというのが、自分の視点から感じている課題感かなと思っています。

○ビッティ委員

先程田村委員から留学生の話題が出ましたので、留学生の目線としては、やはり仙台は住みやすく、自転車があればどこでも行くことができ、物価も東京と比べたら安いので、夜が遅くても急いで電車に乗らなくても寮とか家に帰ることができて、やはり最高なまちだと思います。

インバウンドであれば、一泊二泊というだけになります。留学生をもっと呼べばいいと思いますし、留学観光であり、マスターやドクターだけではなく、学部生も海外から来れば、少なくとも4年間は仙台で留学することになります。それは東北大学のためにもすごく大事であり、まちのためにもすごく大事だと思います。留学のまちとして、その後宣伝できればと思います。

もちろん東北大学はメインになります。みんなで一緒に協力して、留学生をいっぱい増やせばいいと思います。仙台に残ってもらえればいいですが、先ほども話題に出た通り仙台に就職しないで東京とかに行ってしまうけれども、学生の間は仙台にいることになるかと思っています。それともう1つ言いたかったのは、このダイバーシティを理解している方は少ないのではと思います。第1回会議の記事などが出ていましたが、ダイバーシティに反対しているとか日本らしさがなくなるといったコメントがありました。

それも踏まえると、市民にダイバーシティの大切さを伝えていくべきではないでしょうか。

最近そのような傾向が強くなっているのは、オーバーツーリズムの問題があるのかなと思っています。ツーリズムを悪い感じで使われているため、チャンスではなく、面倒なことの扱いになっていると感じます。それは本当によくない傾向だと思います。イタリアでローマとかベネツィアとかの問題ももちろんあるかと思っています。

でもこれはダイバーシティと逆の結果となり、これに対しては何かするべきだと思います。

○大隅委員長

大変貴重なご意見ありがとうございました。

この仙台市ダイバーシティ推進会議の中では、観光客として数日や1週間来ていただいたりする方達のことではなく、一緒に暮らしていき、まちをつくっていく多様なバックグラウンドを持った方々ということ念頭に置きながら指針をつくっていく方がいいのかなと、委員長としては思いました。

宇田川委員お願いします。

○宇田川委員

今のビッティ委員の話をお伺いして、また筒井局長からのお話もありましたので、視点4のところを中心に幾つかコメントさせていただきたいと思います。

今のお話もあったのですが、マジョリティがまだ理解が足りてないというお話だったかと思い、筒井局長もコミュニティづくりや交流の場が重要だとおっしゃっていたかと思っています。

私も同感しまして、日本人や外国人というグループではなくて、AさんBさんという個人として対面して交流すると、その人のもう少し内面が分かったり、その人の個性が分かたりという

ところで、コミュニティづくりですとか、色々な立場の人が交流する場、集まる場を作るというのは非常に意識改革の意味でも重要ななと思いました。

デジタル化の技術も重要で、ぜひ進めていったら良いと思っていますが、他方では、私も行政経験がありますのでご指摘させていただきますと、データはある視点で求めたものしか存在しないものであり、もともとその視点がないとデータがないものだと思います。そのため、今あるデータを分析したところで、今ある視点しかないのです。

もちろん、これからこういう視点で集めていくとか今あることも分析していき、「見える化」させるということは重要なのですが、そもそもどのようなデータを取っていくのかを考えることも重要で、それにはそれぞれの当事者から話を聞いていく、交流を深めていくということが非常に重要だなと思っています。

また、以前の会議でビッティ委員もおっしゃっていた言語の問題も色々あるかと思っています。行政ですと翻訳の予算も限られているところですが、今は、公式のパンフレットなどは難しいかもしれないですけども、自動翻訳ツールだとか、100%ではないですが、もうAIである程度、8割とか、自動で翻訳できるツールが無料でできていますので、それを参考にするとか、必ずしも正しくはない概略でというところで、例えば何かのイベントのときに自動翻訳を流してあげるということをするだけでも、その言語が分かる方にとっては非常にありがたいことですし、イベントの内容が何となく分かるということだけでも楽しめるかなと思いました。

また、オンライン化、デジタル化ということについては、逆にそのようなデジタルについて行けない人たちも、もちろんまだまだいらっしやると思いますので、そういった配慮も重要だなと思います。

あと2点ほど、ちがいへの配慮についても、コメントさせていただきたいと思います。

働き方改革と福田委員もおっしゃって、私もその通りと思っていたのですが、子育て、介護をすることなどに対する配慮が非常に進んでいて、むしろ過度に配慮されてしまうということもあって、これまで例えば県警でも宿直勤務というのが、そのような子育て、介護の人は宿直勤務も免除してくれると、それは配慮になります。が、しばらくそれが5年、10年経つと、宿直勤務の経験がないから昇進ができないということになってしまうということもあったので、例えば完全に宿直勤務を免除するのではなくて、できる範囲で経験させてあげることや、その人個人々人のきめ細やかな対応というのが、この合理的配慮においては重要になってくるかなと思いますので、本当にそれぞれその人その人の、きめ細やかな声を聞くのが重要だなと思いました。

3点目は、小林委員のお話を聞いていろいろ思っていたことを思い出したのですが、先日アメリカに行った際に、いろいろ取り組みを聞いたのは、公道に綺麗な花とかのアートを書いて、それをみんな見ることで、道路の死角になっていたところにみんなさん気が付いて、事故防止になったといった取り組みがありました。

今回もヘラルボニーさんというまさにアートの専門家もいらっしやいますので、何かそういった思いもかけない効果が出ると、それはある意味、観光スポットにもなったりもしますし、面白い発想になると思います。

また、若者が外に出してしまうというのも、まさに私も大学で教えていてそうなのですが、ある程度やはり給料が高いところがなかなかないというところで、仙台にも企業はあるのですけれどもやはり首都圏に負けてしまうというところがあるのでぜひ、企業の活性化についてもやっていただければなと思います。

最後にもう1点だけ、先程のコメントについての補足なのですが、私、世界的な動向について色々コメントさせていただきましたけれども、先進的なものだけを記載して欲しいという趣旨の発言ではなくて、もしそういったことを記載するのであればタイトルに気をつけて欲しいという趣旨でございます。

なので、いろんな新興国だとか様々な国について記載いただくことについては賛成と思っていますので、そちらについても補足させていただきたいと思いました。

以上になります。

○大隅委員長

ありがとうございました。

残り時間が迫って参りましたが、副委員長、もう一度いかがでしょうか。

○石井副委員長

色々なご意見とまた違う角度の話かもしれませんが、見える化ということでは、データや活動の取り組みと合わせて、それを象徴するような「場」を作りたいと思います。

「居場所」という考え方にも繋がり、実空間やリアルな場の中で仙台市が行っていることを見えるような場を作ることです。それは空間のことだけではなく、そこで行う活動やサービスそのものにも繋がっていきます。そのような意味では、今仙台市で整備を進めている新庁舎もそのような場の一つになると思うが、もう一つはやはり「せんだいメディアテーク」だと思います。皆さんご存じのように、建築的にもすごく素晴らしい建物なのですが、市民の居場所として考えた時も、オープンでフラットな空間・場であり、そこにいる人たちの姿、状態・様態が非常に多様であり、様々な立場、考え方の人たちが思い思い集まれる、そして心地よく過ごすことができる、そのような雰囲気を持っている場所だと思います。

せんだいメディアテークは、25年前にバリアフリーやユニバーサルデザインの視点が入って作られています。25年経過した今、そこに、ダイバーシティという新しい概念を入れ込んだ場として再構築する、そのようなことができる空間や場所であり、仙台の象徴であると思います。

そのような分かりやすい場所、誰もがそこに行ってもダイバーシティを感じられるような場所を作っていくことが、これから様々な取り組みをしていく上でも大事だと思います。そのような意味でもせんだいメディアテークは仙台が誇ることができる場所であり、その場所をうまく活用していくことができれば良いと改めて思いました。

○大隅委員長

ありがとうございました。

そうでしたら、筒井局長、もう一度総括をお願いします。

○筒井まちづくり政策局ダイバーシティ推進担当局長

皆さん、本日は本当に濃いご議論をありがとうございました。

もう1回これを整理し直して、今度は先程梅内局長からもお話ししましたが、中間案という形で、もう少し言葉を書き足していく作業を進めていきます。本日委員の皆様からいただいたご意見を踏まえ、特に世界のことや仙台らしさという視点をどのように加えていくのか、また、その先進的な取り組みの紹介をどのように位置付けるのか、それから、評価やチェックの仕方ということも、もう少し言葉にして書いていきたいなと思っております。

本日はたくさんご意見がありましたけれど、やはり仙台市としても、視点の1、2はそれなりに進めてきたところもありますので、もう少しもちろん進めていかなければならないところもありますが、視点の3、4は、施策もあまりなく、やはり進められていない部分だと思っています。その部分をどのように尖った感じに見せられるかどうか、少し丸いかもかもしれませんが、分かるように書いていくことが大事なかなと思っております。

居場所の件もありがとうございました。居場所と愛着とビロッキング、あとはケアの話も出ていましたが、まさに最後、石井副委員長からお話がありましたが、メディアテークの館長が、大阪大学の総長だった鷲田先生で、先生がいつもケアの思考というお話をされており、それはいわゆる一般的な支援を意味するケアではなくて、誰もが凹みもあり欠けているところもある中で、みんなケアしてケアされる、そのような存在であると。そのような考え方で、地域のあり方や施策をもっと考えていくことが必要であり、仕事においてもそのような視点で考えていく必要があるという話をいつもされており、メディアテークがそうした視点を持った場であるべきだとおっしゃっていることを今思い出しました。

まさにそのようなケアシケアされる場所がある意味、居場所なのかなと思いますし、私も実はメディアテークに仕事でずっと関わってしまって、メディアテークがさらにそのような場所としてステップアップできたらいいなととても思いました。
まずはしっかりと中間案に今日のご意見を反映させながら書いていきたいと思っていますので、引き続きよろしく願いいたします。

○大隅委員長

ありがとうございました。

ここで一つだけエピソードをお話したいと思います。

東北大学医学部の同窓会が毎年5月に著名な方をお呼びして講演会を開催しているのですが、2012年は、塩野七生先生に来ていただきました。『ローマ人の物語』などを書かれた方ですが、塩野先生は、ローマが繁栄したのは多様性を重視したからであるということを常々おっしゃっていました。その講演会のときにもう一つおっしゃったのは、タイトルが「瓦礫と大理石 廃墟と繁栄」というものですが、ポイントとして、ローマの様々なところで戦争が起きて、その後廃墟になったまちもある。でも、その後さらにまた栄えるまちもある。その違いは何かというと、人が集まるかどうかというその一点に尽きるということをお話しされていました。震災後というタイミングでそのようなお話があったのですが、そこから12年、今年13年目となったところで、改めてダイバーシティというキーワードで、仙台が東北から人を集めてくるのではなくて、もっと住みやすい、色々な形で住みやすいまちとなることで、様々なところから人が来ていただけるまちになることを念頭に、ダイバーシティの推進宣言にするのか、指針で止まるのかということもあるかと思いますが、検討していけたらと思います。第2回会議も本当に活発なご議論をどうもありがとうございました。では事務局にお返しいたします。

○大沼ダイバーシティ推進課長

それでは、次回第3回の推進会議についてご案内させていただきます。次回会議は10月9日に開催予定です。

今回委員の皆様からいただきましたご意見を踏まえ、遅くとも10月頭頃までには、指針の中間素案をお送りさせていただきたいと思います。次回については以上でございます。

○山口企画推進係長

皆様、長時間にわたりご議論ありがとうございました。以上をもちまして、第2回仙台市ダイバーシティ推進会議を閉会させていただきます。お疲れ様でございました。